ZERO MOSTEL in
MEL BROOKS'

The Producers

A SYDNEY GLAZIER PRODUCTION

featuring ESTELLE WINWOOD CHRISTOPHER HEWETT KENNETH MARS LEE MEREDITH DICK SHAWN as L.S.D. and co-starring GENE WILDER

Director of Photography JOSEPH COFFEY Music Composed and Conducted by JOHN MORRIS Edited by RALPH ROSENBLUM A.C.E.

Production Designer CHARLES ROSEN Costume Designer GENE COFFIN Written & Directed by MEL BROOKS

プロデューサーズ

Distributed by Zazie Films, Inc.

奇才メル・ブルックス監督のデビュー作遂に日本初公開!!

元祖おバカ映画

劇中劇「ヒットラーの春」はスゴイ。
これを笑い飛ばせるアメリカ人って???
うらやましいなぁ。やくみつる(漫画家)

世紀の大傑作　高橋 克彦(作家)

『プロデューサーズ』を世紀の大傑作と言い切ることに躊躇はない。いったい何度見ては笑い転げ、筋立ての上手さに感嘆したことだろう。メル・ブルックスは掛け値なしの天才監督だが、その彼の文句なしの最高作品である。これが日本で劇場未公開だったと知って正直ショックを受けた。私の暮らす岩手はともかく、東京では必ず上映されたものと思い込んでいた。だが、それでこの作品に対する日本での評価の低さやソフト化における軽い扱いの理由が分かった。未公開ではまともな映画評も行われないし、一般の反応も確認できない。ソフト化への逡巡も当然というものだ。しかし……鑑識眼が足りない。私なら世間の評価がどうであれ、20世紀の大傑作と銘打って普及運動に取り組む。これより面白い映画があったら勝負してきなさい、という感じだ。

ゴージャスさと怪優による怪演は喜劇に付き物であるけれど、まさにこの映画はそのオンパレードで、そこにもメル・ブルックスのしたたかな才能を窺い知ることができる。ありがちな嵌め込みにせず、必要な伏線や当然の展開としてその場面を持ってくる。オーディションの際の仰天のフラワーソング。本番導入を華麗に彩る悪趣味とも言える圧倒的なヒトラー賛歌、アホな美人秘書が無心で踊りまくるゴーゴー、すべてが結末に繋がる伏線だ。こんなに計算され尽くした喜劇は他にない。ああっ、私もこの映画を大きなスクリーンで見てみたい。30数年を経て『プロデューサーズ』の真価が問われる瞬間となった。そこに立ち会いたいという気が無性にしている。

ストーリー　かつてはブロードウェーにその名を轟かせた演劇プロデューサーのマックス・ビアリストック(ビアリー)も、今は金に困り、有閑マダム相手にセコい商売をする身だが、ヘンな会計士レオ・ブルームと知り合い合法的なボロ儲けの方法を考えつく。それは、金を集められるだけ集めて公演し、それを失敗させるというもの(公演が成功すると投資者に金を返さねばならない)。彼らは、最悪の脚本を、最悪の演出家が、最悪の俳優を使って舞台化すれば、間違いなくコケるとほくそ笑んだ。間もなくふたりは、「ヒトラーの春」という最悪の脚本を発見する。この大駄作を書いたフランツ・リーブキンというナチス信奉者はブロードウェー公演の話に大感激。また史上最悪と言われている演出家のロジャー・デブリー(女装癖あり)もレオを気に入り演出を快諾。ヒトラー役には"LSD"ことロレンゾ・セント・デュボアという、イカレた役者が見つかった。バアさんたちから金を集めに集めた彼らは、絶対の自信を持って初日を迎えるが、予想に反して「ヒトラーの春」はなんと大成功……。

ザッカー兄弟もエディ・マーフィーもジム・キャリーもいなかった頃、ハリウッドのナンセンス・コメディの王様といえばメル・ブルックスだった。彼の決して垢抜けず、ストレートにくだらないが、どこか哀愁漂い、そして実はかなり過激だったりする独特の笑いには吉本や松竹新喜劇など、日本の関西系の喜劇にも通じる人間的な味わいがある。『プロデューサーズ』は、映画監督としての彼の記念すべき長篇デビュー作であると同時に、おそらく最初で最後のオスカー受賞作。チャップリンの『伯爵婦人』と『独裁者』へのオマージュをも匂わせつつ、ショー・ビジネス業界のいかがわしさを鋭く風刺すると同時に、徹底的にナチスを茶化す反骨的ギャグ精神こそ笑いの王道だ。

特に[最低かつ悪趣味な舞台が予想外に受けてしまう]という、後のエド・ウッド人気を筆頭にしたサイテー映画ブームをも予見していた抜群のアイデアは、ギャグのようで実は業界の真実だったりもする。いずれにせよ、"ヒトラーの春"の一大レビューを見ずして現代コメディを語ることはできない。メル・ブルックスの再評価は時代の必然である。　江戸木 純(映画評論家)

演出家にとって<劇中劇>の演出ほど楽しいものはない。<劇中劇>は、本格的につくろうが、パロディとしてつくろうが、実験的作品にしようが、とにかく好き勝手に演出する事が出来る。面白く仕上がらなければ、カットすれば良い。そう!<劇中劇>では、失敗する事すら許されている。メル・ブルックスの『プロデューサーズ』は、この<劇中劇>をやりたいが為につくられたような映画である。『ヒトラーの春・アドルフとエバの戯れ』と題されたこの<劇中劇>、第2次大戦のあのヒトラーが主人公、おまけに、なんとミュージカルなのだ。ナチの親衛隊がタップダンスを踊るナンバーは、スタンディングオベーションもの。<劇中劇>ジャンルの映画ベスト10を選べと言われれば、間違いなく僕は、この『メル・ブルックスのプロデューサーズ』を推薦するだろう。　喰 始(ワハハ本舗・専属演出家)

1969年アカデミー賞 最優秀脚本賞受賞
1996年アメリカ国立議会図書館 映画保存委員会 保存認定作品
製作:シドニー・グレイジャー／監督・脚本:メル・ブルックス／撮影:ジョゼフ・コフィ／音楽:ジョン・モリス／衣装:ジーナ・コフィン／出演:ゼロ・モステル(マックス・ビアリストック)／ジーン・ワイルダー(レオ・ブルーム)／エステル・ウィンウッド(〝抱いて、キスして〝老女)／ケネス・マース(フランツ・リーブキン)／ディック・ショウン(LSD)／リー・メレディス(ウーラ)／クリストファー・ヒューイット(ロジャー・デブリー) 1968年／アメリカ映画／カラー／88分　配給:サジ フィルムズ

＊5／5（土）～7（月）＝6：55～
＊5／8（火）～11（金）＝3：05～
＊5／12（土）～14（月）＝4：50～
＊5／15（火）～18（金）＝1：00～

前売鑑賞券￥1400にて好評発売中！！（当日一般￥1700処）
※特製ポストカード付前売券（劇場窓口のみ）

ホワイティ梅田泉の広場M-10右上がる東へ5分
扇町ミュージアムスクエア
☎06・6361・0088　www.oms.gr.jp